

令和3年度 第2回丹波市総合教育会議 会議録（要約）

日時：令和4年2月24日（木）午前10時40分～午前11時42分

場所：丹波市役所山南支所3階 大会議室

出席者

市長	林 時彦
教育長	片山 則昭
教育長職務代理者	深田 俊郎
教育委員	横山 真弓
教育委員	安田 真理
教育委員	上羽 裕樹
副市長	細見 正敏
ふるさと創造部長	近藤 巧
ふるさと創造部次長兼総合政策課長	清水 徳幸
教育部長	藤原 泰志
教育部次長兼学校教育課長	足立 和宏
教育部教育総務課長	足立 勲
教育部学事課長	井尻 宏幸
教育部文化財課長	山内 邦彦
教育部教育総務課企画調整係長兼庶務係長	足立 真澄
総務部長	太田 嘉宏
総務部総務課長	荒木 一
総務部総務課総務係主幹	青木 明美

傍聴者 なし

1 開会

- 太田部長進行
- 市長部局出席者自己紹介
- 上羽委員自己紹介

2 市長挨拶

- 林市長挨拶

3 協議事項

(1) 令和4年度丹波市の教育（実施計画）重点施策について

○藤原部長

- ・「誇りをもって帰ってこいよと言えるまち」「丹波市に住みたいと思えるまちづくり」のための教育施策を展開すべく、令和4年度丹波市の教育計画を作成した。

(資料に基づき説明)

○片山教育長

- ・認定こども園や小学校で、子供たちが同じ方向を向いて黙食をしている姿を見ると、なんて寂しい給食なのと思った。
- ・コロナが続いている状況の中、平素から「密になるな」「関わるな」と言ってきた。そうでなくても、人間関係が希薄になっている時代であるため、人間関係の再構築を目指したい。子供同士、子供と先生、子供と保護者の人間関係を再構築することが一番大切だと思っている。
- ・丹波市の子供は、非常に粘り強い特質があると感じている。今すぐ良くするというのではなく、基礎をしっかり身に付けることが大切であり、学習だけでなく人権教育の面でも、義務教育の間に基礎を学ぶことが大切である。それが、今若干増えてきている不登校の減少にも結びついていくと思っている。

○林市長

- ・私の理念として、人と人の触れ合いが一番大切だと思っている。担任の先生や友達と物理的に触れ合うこと、話をすることによって、私自身も成長できたと感じている。
- ・コロナについては、「恐れ過ぎず」と言ってきたが、そうは言いながらもどうしてもないこともあるため、できることはやっていきたい。
- ・認定こども園やアフタースクールでも感染者が出ているため、触れ合いなさいとは言いきいが、時期が来れば、人と人が触れ合って子供たちが成長することが一番大切だと思っている。
- ・学校においても、対策を取りながら、やれることはやっていただきたい。例えば、アクリル板を設置して、マスクを外して笑顔や表情を見ながら話すというだけでも、触れ合うことができるのではないかと考えている。

○太田部長

- ・子供の成長の中で、人間力を高めるためには、中でもコミュニケーション力が大切だと言われているが、コロナ禍で物理的な触れ合いや話し

合いができない時代において、そこをどのようにカバーしていくのが課題であるということが共通した認識でないかと受け止める。

○横山委員

- ・ 2年間のコロナ禍は、子供たちに深刻なダメージを与えている。
- ・ 将来について、ただ漠然とした不安を抱えている若者が増えているが、身近に話を聞いてくれる人がいることで、その不安が払拭されると思う。
- ・ 言語化が難しい世代である小中学生について、小学生はコロナで何もわからないまま3年が経ち、中学生ならコロナの中で3年間が終わってしまうことは、非常に深刻な問題だと思う。
- ・ どこにも行けない、色んな人と触れ合えない中では、身近な大人がモデルになることが必要。例えば、職員が生き生きと楽しく働いている姿を見せるなど、そういう大人の姿を学べる場が非常に重要になってくると思う。
- ・ 今の若者には、我々の世代にはわからない、漠然とした不安があることを認識して、学校教育を進めてほしい。
- ・ 不登校が全国的に増えている中で、どのようにして学校へ戻すのかという話になるが、兵庫県の資料を見ても、やはり学校に戻すことが目的ではなく、その子の社会的自立をいかに達成していくかということが、不登校対応の目的でなければならないと思っている。
- ・ 臨床心理士の配置を非常に嬉しく思っているが、子供や保護者が相談したいと思った時には、いつでも速やかに対応できるような制度として今後発展させていただきたい。まずは週2日からということであるが、常勤で対応できるように考えていただきたい。

○林市長

- ・ 漠然とした不安を抱えている状況は非常に心配である。
- ・ 未来は開けているということを、子供たちに感じさせるような状況をまわりの大人が作っていかなければいけないと思う。
- ・ 先生と話がしたいという子供たちがいるなら、職員だけでなく先生自身が子供たちを引っ張っていけるような環境になればよいと思う。
- ・ 子供たちには、将来に対して不安感ではなく、自然に明るい未来を持つ雰囲気になるのが一番よいと思う。
- ・ まわりの大人がしっかりと見せるというのが大切なことであり、今はそれしかできないのかなと思う。

○太田部長

- ・ 臨床心理士については、まずは週2日体制から始め、現場での動きを見

ながら将来的に必要なであればその充実を考えていくべきではないかと考える。

○片山教育長

- ・子供にとって一番身近な大人は教師である。不登校については、社会的自立が最終的な目的ではあるが、そうならないために、教師としてどう取り組んだらいいのかということも、まだまだ勉強する必要があると感じている。
- ・教育支援センターの中の研修機能をもっとしっかり充実させて、子供への対応についての中身を充実させていけば、不登校は防げると考えている。
- ・市内の企業や看護学校長等との話で共通しているのが、人がいないということ。働き手がない、看護学校に入学する人がいない。
- ・市内に世界一流の物を作る企業があることを大人も子供も分かっていない。トライやるウィークや企業への見学を通して、地域との連携を取っていくことが必要だと考える。看護学校にしても、看護師になりたい子供が地元の学校に来ないということは、もっとPRが必要だと考える。
- ・地域と学校との連携を子供たちが目の当たりにすることによって、地域に対する誇りになり、地域を知ることにもなり、また自信も持てるようになる取組を考えていこうと思っている。

○太田部長

- ・市内に、世界に誇れるような技術や企業があるにもかかわらず、子供たちが知らないということは、大人たちが知らせていないということだと思う。そのあたりの取組ができればよいと思う。

○深田委員

- ・昨日、トレイルランのテレビを見た。確かに、丹波市出身で丹波が嫌いな子は多いが、丹波の子供たちは良い子が多いというギャップの中で、丹波を見つめて帰ってきたらよいと思うが、その素地がまだ成り立っていないと思う。
- ・先日来丹したセミナーの講師から「丹波でこれだけは食べて帰れというものは」と聞かれても出てこなかった。飲食店を紹介するだけで、名物も出てこなかった。
- ・教育長は「不登校やいじめはなくせる」と言われており、そのためには、臨床心理士が週2日では足りないだろうという議論をしてきた。臨床心理士を置き、先生方の研修もあれば、子供たちの不登校がなくなる、ゼロにできるという議論をしてきた。できれば4月から、臨床心理士の勤務体制を週3～4日、常勤にしてほしい。

- ・スクールサポートスタッフについて、これは3年ほど前に、国が先生方の働き方改革のために、事務量を減らしたり、業務を手伝ったりしてきたものだが、コロナで国の手を離れてきたため、市の負担になってきた。今は、消毒作業などのコロナ関係の仕事もされていると聞くと、全校にこのスタッフを配置している市もあるようなので、先生の働き方改革を考えつつ、スタッフの配置について考えていただきたい。
- ・丹波篠山市が高校生までの入院費用を無料にするという記事が出たが、これに関連して、丹波篠山市から奨学金を受けて看護学校に通う生徒が、卒業後、丹波篠山市で就職すれば、奨学金の返還は免除されるという話を聞いた。子供たちが一生懸命勉強をしていて、金銭面で何か問題があれば、市がそれをカバーしてあげる抜本的な制度を考えてもいいのではないかと思う。
- ・子供たちに経験や体験を積み重ねつつ、色々なことを見つめていける、そして丹波を振り返る、そのあたりのバックアップをお願いしたい。

○林市長

- ・今のところ考えているのは、一度やってみて、いけるようなら広げていこうということ。できない理由を考えるのではなく、できることを考えようと常々思っている。
- ・丹波篠山市の奨学金のことは初めて聞いたが、医療費については、丹波篠山市は、中学生高校生の入院費用だけの免除だと認識している。丹波市は中学生以下の医療費全般を無料にしている。高校生の入院費用の免除については、金額的に大きな負担にはならないと思うので、検討してみようと思う。
- ・子供たちに対することは、新年度予算でも色々と考えている。子育てや教育について要望をいただければ、しっかり考えていきたいと思っている。

○安田委員

- ・コロナ禍で不登校が増えているが、子供だけでなく、保護者の働き方まで変えなければならぬ状況に陥っていると感じている。
- ・子供が家にいたり、支援が必要な場合、保護者が働きに出られなくなったり、仕事を変えてでも家にいなければいけない状況がある。
- ・コロナ禍で、子供とどう接していいのかわからない、子供と外へ出かけたが、丹波市内では人目が気になって出られないというのが現状。できれば、人目を気にせず親子で外へ出られる情報があればよいと感じている。

○林市長

- ・1月にPCR検査機を8台導入した。それを活用し、医師が検査をして、即日結果が出せるようになったことで、学校を休む期間を短くすることができている。国や県が情報を流した薬局での無料検査は、検査キットがなく、実際は全く追いついていない。
- ・出かけるということに対しても、市としてどういうことができるのか考えさせていただきたい。
- ・自宅待機になって外へ出られない方への食糧や物資の提供を、福祉事務所と連携して取り組んでいる。市民一人ひとりに寄り添うことを考えている。

4 その他

丹波少年自然の家のあり方協議について

○近藤部長 資料により説明

○深田委員

- ・自然の家は、子供たちの非日常的な場所として活用はあるだろうと、教育委員の中で議論をした。丹波市の子供たちに限って見れば、非日常的な空間として活用できる施設として、なんとかして残していただければ有難い。

○太田部長

- ・ご意見として伺わせていただく。

5 閉会

○太田部長

- ・本日の会議において、課題の認識と方向性の確認はできたと思っている。今後の具体的な取組としては、重要課題ヒアリングや戦略的ヒアリングなどの協議の場で、教育委員会事務局としてさらに練り上げたものを出していただき、改善すべきところは改善していくということにも繋げていければと考える。